

第2回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

ベルガモット・メモリー

皆笹麻希江・京都府

ずっと昔、私は一世一代の恋をした。

彼の誕生日が近づいた頃、プレゼントは何が良いかと訊ねた。彼は手編みのセーターを所望した。私は焦った。

「それは、クリスマスプレゼントにする」

そう言ったものの、私は編み物が出来ない。先端恐怖症で、編み針を想像しただけで、身の毛がよだつ。

買ってきたセーターのタグを外して渡そうか、それとも母に編んでもらおうか、などと良からぬ策略を思いめぐらせた。

しかし恋のパワーは計り知れない。彼のために「やったらやらないの」と一念発起した。

やるからには、とことんせねば気の済まない質だ。草木染めをする友人の手を借り、我が家の庭にはびこるハーブ、ベルガモットで毛糸を染めた。緑のグラデーショナルに染まった。色が落ち着くと、私は教習本と睨めっこし、肩をほぐしながら格闘した。

順調に編み進んだが、あと少しのところ糸が足りなくなった。裾の二段を、思い切って茜色の糸で仕上げた。どこにもない、世界で一枚のセーターが出来上がった。彼は、寒い季節になると、よく袖を通してくれた。

歳月が過ぎた。師走の街を歩く私の目に、あのセーターが飛び込んできた。ホームレスの自立を応援するために、創刊された雑誌、ビッグイシューを販売する男が着用している。大阪駅と阪急を結ぶ信号が変わり、行き交う人々が、立ち止まる私に舌を鳴らした。

（まさか、彼……）心がわさわさした。しかし声を掛ける勇氣はなく、行き過ぎた。そして、待ち合わせていた友人の腕を引っ張り、男の立っていた場所に戻った。

「うーん。あのこのような気もするけど」

首を傾げる友人に、手伝って染めてくれたあのセーターに違いない、と詰め寄った。裾が隠れて、見えないのが悔しい。

男が手にした雑誌を高く上げた。私たちは男の後ろ側にも回った。しかし彼とは断定できぬまま、この日はランチを食べて帰った。

気になって仕方がなかった。確か、結婚して花屋を開いたはずだ。子供が居るとも聞いていた。それなのに何故。彼に何があったのか。私は男を彼だと、決めつけていた。

次の日も、その次の日も、私は彼の立つ場所へ足を向けた。地下鉄の中で、今日こそ、

雑誌を買おうと、心に決める。

信号待ちのあいだ、彼に恥をかかせるつもりかと、決心を責める声が大きくなる。

ひとつの心が、真まつぷたつに割れた。

「わぁー」と叫びたくなる自分を押さえ、何食わぬ顔で、道行く人々と足並みを揃える。結局、横目で男を見過ごし、喫茶店に入った。

あの男が彼だとしても、私には何も出来ない。思い入れのあるセーターと、似ているだけかも知れない。何を動揺している。ただ、ちよつと確めただけ。確かめる意味なんて無い。分かっている。けど……。

私は、いつもより苦く感じるコーヒーを、すすりながら自問自答を繰り返した。店内に流れるクリスマスソングが、癪に障る。

もう止めよう。そう決めて店を出た。それからは、地上を歩かず、地下ばかり歩いた。年が明けたある日、スキーバスに乗る姪を見送った後、あの信号まで来てしまった。

背を向けて、片付けをする男のセーターの裾が見えた。茜色だ。声が出た。振り向いた男は、彼では無かった。男は愛想笑いをし、外した名札を、再び首にぶら下げた。

私は五百円玉を差し出し、声を掛けた。

「素敵なセーターですね」

よく見ると、セーターには虫食いのあとがあり、袖口も擦り切れていた。

「はい、これベルガモの毛です」

男は胸元を引っ張り、鼻頭を上に向けた。

「ベルガモットという、ハーブで染めた毛糸と、ちやいますの」

私が悪戯つぼく言うと、男は頭に手をやり、苦笑いした。

「実はこれ、去年まで、ここに立ってた兄にいちゃんからの貰い物ですわ」

グループホームで一緒に暮らしていた兄ちゃんが、出ていく際に、譲ってくれたと言う。

「これ、勝負服や、言うてましたわ」

男はこれを着て立ってから、売り上げが伸びたと頬を緩めた。そして彼の名前を口にした。彼は、介護福祉士の求職者支援訓練の、受講が決まったのだ。

「気の強い娘むすめが編んでくれたらしいですわ」

その娘の強気にあやかかって、どん底でも頑張れるような気がしたと、彼が言った言葉を男が告げた。私は「ふん」と鼻を鳴らした。

そうだ。ベルガモットの花言葉は、燃える思いだ。どんなに辛くても、その思いさえあれば、這い上がれる。セーターを通してエールを送った。にやけた心が顔に出た。

私は男に向かって、別嬪の笑顔を放った。